

I. 南京大学への教員派遣事業

1、派遣教員、奈良女子大学研修生

派遣教員	吉川仁子	奈良女子大学文学部 講師
研修生	久保田恭子	大学院人間文化研究科博士後期課程言語文化学専攻3回生

2、派遣期間

平成22年9月21日(火)～9月28日(火) 8日間

9月21日(火) 関空—南京禄口空港 移動日

9月22日(水)～24日(金) 南京市内見学

9月25日(土)～27日(月) 講義

9月28日(火) 南京禄口空港—関空 移動日

3、事業概要

3-1 講義日程

授業日	講義時間	講義題目
9月25日(土)	08:00～12:00	・漱石について 伝記的事項と文学史的 위치づけ
	13:30～15:30	・『三四郎』 美禰子の内面—「煤煙」の女主人公との比較を通して考える
	18:30～19:30	・同上
	19:30～20:30	・交流会
9月26日(日)	08:00～09:30	・『三四郎』 つづき
	09:30～12:00	・『それから』 DVD 視聴及び検討
	14:00～16:00	・『それから』 映画との比較検討 ・『それから』—代助は三千代との恋愛をどのようにとらえていったか
9月27日(月)	08:00～10:00	・『それから』—代助は三千代との恋愛をどのようにとらえていったか つづき
	10:00～12:00	・『門』—〈因果〉と〈運命〉という語を中心に
	14:00～16:00	・同上 ・『こゝろ』の研究史—読み直しの発端

3-2 講義概要

(文責: 吉川仁子 講師)

テーマ: 夏目漱石の作品 前期三部作を中心に

夏目漱石の前期三部作と呼ばれる『三四郎』『それから』『門』を中心に扱った。夏目漱石（1867～1916）は、日本を代表する作家の一人であり、明治改元の前年に生まれた、まさに明治と共に歩んだ作家である。作家であるとともに、すぐれた文明批評家・思想家でもある漱石は、中国においても『吾輩は猫である』『こゝろ』などの代表作を通じてよく知られており、中国の作家・思想家である魯迅と比較されることも多い。また、文体も大半の作品が言文一致体であり読みやすい。これらのことから、漱石作品は、中国人学生にとっても、興味・関心をいだきやすいと考えられ、翻訳もあるので、講義で扱う作品を講義までに読んでおくようにシラバスで指示した。教材は、各作品毎に資料レジュメと解釈レジュメを作成し、全てPDFファイルにして、葉教授にメールで送付、葉教授から、受講者にメールで転送して配布してもらうという形をとった。レジュメはA4版約90ページである。受講生は、成績評価の対象となる大学院1回生と、聴講の大学院2回生、学部4回生で、あわせて、約40名であった。

9月25日（土）08：00～12：00

漱石について 伝記的事項と文学史的立場づけ

講義にあたり、まず、夏目漱石という作家についての説明から始めた。南京大学の授業でも日本の代表的作家と、その作品について学習しているということで、既知の部分もあったかも知れないが、年譜を示しながら、十分に時間を使って作家を説明することで、作品への関心も深めてもらいたいと考えた。漱石の生涯において、一般的に転機とみなされる、イギリス留学、朝日新聞入社、修善寺の大患を画期として、作家以前の時代、作家としての模索期、前期、後期という形で説明した。作者の体験を作品解釈に結びつける読み方と、それに批判的な立場についても言及した。

9月25日（土） 13：30～15：30 18：30～19：30

9月26日（日） 08：00～09：30

『三四郎』 美禰子の内面―「煤煙」の女主人公との比較を通して考える

今回の集中講義では、いわゆる前期三部作と呼ばれる『三四郎』『それから』『門』を取り上げた。恋愛が一つの軸になっており、若い読者には共感しやすいと思われる点、また、漱石についてよく指摘される文明批評的な観点が前期作品にはよく表れている点から、教材として取り上げて読むに適切と判断した。

『三四郎』では、女性主人公の美禰子という人物をどのように解釈するかが一つのポイントである。彼女の造形に関わっては、作者自身が手がかりになる発言をいくつかしているので、それらを参照して、考察を進めた。美禰子のモデルとして、実在の人物としては平塚明子（のちの雷鳥）、虚構上の人物としてはゾーデルマンの小説のヒロイン、フェリシタスが影響を与えたと想定されるが、モデルといっても引き写しということではなく、どのような要素を美禰子に生かして造形したかを、検討した。「新しい女」と見られている美

禰子であるが、当時の女性の置かれている立場から決して自由ではなかったことを読み取った。あわせて、漱石作品の女性たちの多くが、言葉を封じられていることを、手紙と言う観点から考察した意見を参考までに述べた。

また、当時文壇において、主流であった自然主義文学との関わりについても説明した。

9月26日(日) 09:30~12:00

『それから』DVD視聴及び検討

映画『それから』1985年11月公開 東映 130分

監督：森田芳光、脚本：筒井ともみ、

出演 長井代助：松田優作、平岡三千代：藤谷美和子、平岡常次郎：小林薫

南京大学所蔵の、中国語字幕つきDVDを視聴した。見る前に、冒頭の代助が目覚めるシーンと、作品のクライマックスである三千代と代助の会見のシーンは、原作と若干の違いがあるので、その部分を特に注意するように指示し、後は通して視聴した。

9月26日(日) 14:00~16:00

9月27日(月) 08:00~10:00

『それから』一代助は三千代との恋愛をどのようにとらえていったか

作品の中でポイントになる部分が映画でどのように描かれているかを確認して、注意喚起したのち、それらのシーンがどういう意味でポイントになるのか、作品内容の説明のを行なった。

『それから』では、主人公である代助の、裕福な家の次男坊で三十歳になっても職に付かず親からの援助で暮らすという存在の仕方と、彼が本当に三年前から三千代を愛していたのかという点を中心に検討した。代助が過去から現在の間で遂げた変化が、何によってもたらされたのかを考察し、そこに三千代の存在がどのようにかわるかを検討した。三千代が過去において代助を愛していたことは明確なのに、代助の方の過去の愛があいまいであるのは、代助は三千代と平岡の間を取り持って、二人が結婚してしまってから、初めて三千代の存在というものに気がついたのであり、代助が、男どうしの友情の中に、三千代への愛を見失っていたことを指摘した。特殊な存在様式を持ち、また、作者に重なる文明批評的な言説を語る代助だが、作者は、その代助的な存在の仕方を決して肯定しているわけではないことを、資料を通して確認し、代助の自己目的的な存在のしかたを破っていくものとしての三千代存在の重要性を説明した。また、代助が三千代への愛を確認していく際に「自然」という語が多用されることについての問題点についても指摘した。

この作品では、指輪、銀杏返し、百合といった小物や、赤という色が象徴的な役割をはたしており、細部にこだわって読む面白さを実感させてくれる作品でもある。小物に注目した論考の紹介、冒頭とラストの赤の呼応などを指摘などを通して、作品を読む時に、どういう点に着目していくかについても示した。

9月27日（月） 10:00～12:00、14:00～16:00

『門』－〈因果〉と〈運命〉という語を中心に

『門』は前作『それから』をうけて、友人の妻同然の存在であったお米と結ばれた宗助の静かな生活が描かれる。作品では、過去は作品半ばまで明かされない。『門』と『それから』の連続性は、人物の配置においては類似しているが、愛の成り立ちについては異なっている。主体的に愛を選んだ代助と、意志を超えたものに動かされる宗助とは、自己とは何かという問いでつながっているということ、主たる問題として考察した。考察にあたって、作中の「因果」と「運命」という語に着目し、宗助が「因果」という安定した人為的な物語から抜け出してくるのが、『門』という作品であることを論じた。作中には漱石自身の参禅体験も取り込まれており、禅についての漱石の言及を資料を見ながら確認、また、参考資料で、禅の基本用語なども確認した。

全体の講義が終了して時間が余れば『こゝろ』の研究史についても紹介する予定だったが、『門』についての講義が終了した後ほんのわずかの時間しか残っていなかった。しかし、『こゝろ』についての関心は高く、ほんの少しでもという要望があって、『こゝろ』の読み直しを招来した1985年に発表された小森陽一氏と石原千秋氏の論文について紹介した。

3日間を通して、作品の解釈を提示したが、近代文学の研究方法は多種多用である。今回は、作品論の手続きとして、執筆背景に関わる作者の日記、書簡、その他、作者の評論、談話など、作品に関係すると考えられる作者の言説をできる限り資料として示した。しかし、これら作者の言及は、基本情報、傍証であって、もっとも大切なことは作品の本文を読むことである。一語一語にこだわって読むことである。作者と作品を切り離すテクスト論と、その意味ではそんなに離れていないと思っている。作品を読み解くために必要な情報（語の使われ方、当時の風俗、時代背景、等々）を出来る限り調べて、作品解釈への道を開くという手順の一端を、不十分ながらレジュメ等でお示しした積りである。少しでもお役に立っただろうかと思いつつ講義を終えた。

3-3 学生交流

（文責：吉川仁子 講師）

講義初日の9月25日（金）の19:30～20:30まで、受講者と奈良女の派遣学生との交流会が開かれた。日本から持って行ったお菓子を食べながら、こちらの準備してきた、文学部日本アジア言語文化学コースの説明や、日中の学生の読書傾向についての話題をもとに、意見交換をした。交流というより、奈良女子大学の紹介のような感じになっ

てしまったが、南京大学の日本語学科に学ぶ学生たちの興味の幅が、文学だけに限られているわけではなく、経済学や社会学等に関心を持っている学生もいることが、質問などから窺え、有意義であった。こうした学生の関心のありようが、今後の交流に反映されるとよいと思う。